

一神教の虚像と実像

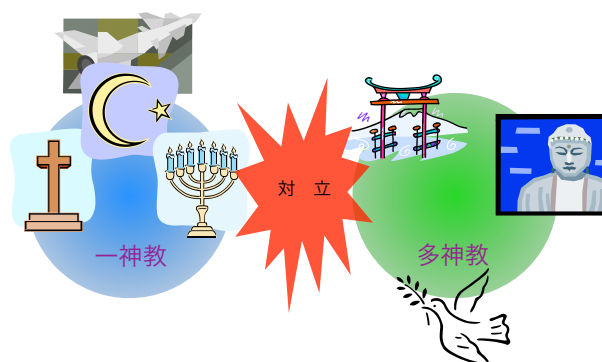
Overview

- 日本社会における一神教
- 3.11以降の一神教と多神教

日本社会における一神教

- 一神教（特にキリスト教）に対する恐怖と憧れ
- 虚像と実像の混在
- 近代日本における天皇制と国家神道の「一神教」的機能
- 一神教と多神教をめぐる言説

一神教と多神教のイメージ



一神教と多神教をめぐる ディスコース（→虚像への接近）

- ユダヤ教・キリスト教・イスラームは唯一の神を信じる宗教であるから、対立・衝突を避けることができない。
- 戦争や自然破壊など、現代世界の問題は一神教（文明）に帰するところが多く、日本の多神教（文明）こそが一神教的思考の限界を乗り越え、問題解決に貢献すべきである。
- 一神教は排他的・独善的・好戦的・自然破壊的であるのに対し、多神教は寛容・協調的・友好的・自然と共生的である。

3.11以降の 一神教と多神教

中沢新一「日本の大転換」（『すばる』6月号）
における「一神教的技術」を素材として

原子力と一神教

- ほんらい生態圏には属さない「外部」を思考の「内部」に取り込んでつくられた思考のシステム、それはほかならぬ一神教（モノテイズム）である。「第七次エネルギー革命」の産物である原子力技術の、宗教思想における対応物が一神教なのである。（192頁上）

神々と「神」

- 一般的な神々：「山や川の女神であったり、動物界を支配する神」
- 一神教の神：「抽象そのものの神」「環境世界の外部にいて、そこから世界そのものを創造した神」（193頁上）

神々の世界

- 「媒介」による思考は、じつに繊細で、複雑で、美しい世界の本質を理解できる。そこでは、悪や病でさえ、生態圏の構成要素である。絶対的な善などは、ここにはない。しかし生態圏が自然状態にあるとき、全体は美しい秩序を保ち続ける。（193頁下）

一神教の神

- 一神教はその生態圏に、ほんらいはそこに所属しないはずの「外部」を持ち込んだのである。モーゼの前に現れた神は、無媒介に、生態圏に出現する。そんな神を前にしたら、生身の人間は心に防護服でも着装しないかぎり、心の生態系の安定を壊されてしまうだろう。（194頁上）

不安定の原因

- 一神教が思考の生態圏に「外部」を持ち込んだやり方は、原子核技術が物質的現実の生態圏にほんらいそこに所属しない太陽圏の現象を持ち込んだやり方と、きわめてよく似ている。思考の型としては、まったく同型である。一神教出現以前の人類の宗教は、生態圏の閾域の内部でおこなわれてきたが、一神教の出現とともに、そこい生態圏に所属しない神が組み込まれることによって、人類の宗教には不安定が持ち込まれた。（194頁下）

一神教的な技術

- このような意味で、原子力技術は一神教的な技術であり、誤解を恐れずに言えばユダヤ思想的な技術である。（195頁上）

考えるべきポイント

- 一神教の神：生態圏の「外部」とは？
- 一神教は、生態圏に「外部」（神）を「無媒介」に持ち込む思考なのか？
- 自然状態にある生態圏を「美しい秩序」と見なすことは可能か？

応用的課題

- 天地創造の始まりに「光あれ」（創世記1:3）と言われて輝き出した光と、1945年、ヒロシマ、ナガサキの上空で輝いた光と、2011年、フクシマの原子炉の中で暴走した光の間の違いは何か？

知識の利用範囲

- モーゼの神体験を援用して、神を外部化・超越化するより、エデンの園における神の人間に対する語りかけ（創世記2:16-17）に注目すべきではないか。
- 「善悪の知識の木」とは何か？

- 主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」（創世記2:16-17）
- 蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。（創世記3:4-6）

歴史的・文明論的考察

- 近代日本においては、天皇神話によって、すべてが「媒介」された「美しい秩序」が形成された。
- その秩序は、ヒロシマ、ナガサキへの原爆投下によって終焉を迎えた。
- 3.11の東日本大震災によって、日本は再び原子力エネルギーの恐怖を刻印された。問題を一神教に押しつけ（問題の「外部化」）、多神教的な自然秩序を礼賛することは、適切な文明批評と言えるだろうか。

まとめ

- 近現代日本史における一神教と多神教をめぐるディスコース（虚像の生成過程）を批判的に検証する。
→ 小原『宗教のポリティクス』第四章
- 一神教的な考え方と多神教的な考え方を排他的・敵対的にならない形で関係づける。
 - 問題を引き起こす状況（条件）の分析こそが大切。
- 科学的知識の安全な運用のために、倫理的・宗教的価値規範の普遍的側面を追求する。
→ 小原「安全神話とは何だったのか」（京都新聞 5/10）

現代のこゝろば



こはら かつひろ
小原 克博

神話は世界の起源や人間の誕生だけでなく、滅亡への恐怖をも語り伝えてきた。人類は太古の昔から滅亡のトラウマを神話的に保持してきたと言え換えてもよい。ノアの洪水物語はその一例であるが、他にも、シュメール文明からアジア、アフリカ、オセアニア、南北アメリカ大陸の先住民に至るまで、大洪水による人類滅亡と再生の神話は多数存在している。

3・11以降、何度「安全神話」の崩壊という言葉を見聞きしたことだろうか。確かに、原子力

発電は安全だという言い方は、根拠のない「神話」であったと多くの人が感じているに違いない。しかし、多くの神話は人間の慢心を批判し、自然への畏れを教え、人知の限界を知ることの大切さを語ってきた。

安全神話の崩壊をきっかけとして、神話的に語られてきた安易な安全対策を改め、いっそう安全な原発の建設を目標とすべきなのか。あるいは、古代からの神話的知恵に背を向けることなく、節度を持って自然の恵みを分かち合う自然エネルギー

安全神話とは何だったのか

(代替エネルギー)の開発に大きく踏み込み、原発への依存度を低減していくべきなのか。エネルギー問題の解決は決して一筋縄にはいかないが、おおざっぱに言えば、このような分岐点に我々は立たされているのではなからうか。

その分岐点を前にして、我々がこれまで依拠してきた「安全神話」とは何であったのかを振り返ってみることが必要だろう。安全神話を構成していた物語の一つは、原子力を「必要悪」として許容してきたことである。ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下によって放射能のおぞましさを刻印された日本の戦後史において、核兵器は「絶対悪」として理解されてきた。核保有国が核兵器を「必要悪」と考え

国は取ってきたのである。ところが、そのような日本にとっても必要悪としての原子力は、国民一体の推進政策の結果、必要「悪」としての側面を限りなく薄められ、むしろ「よきもの」としてアピールされてきた。そして、大多数の国民がそれを信じた。

安全神話の根っこにあるもう一つの物語は、成長神話という別の神話的語りである。日本経済が成長し続けることに最大限の価値が置かれ、そのために大量生産・大量消費が前提とされた。経済成長には大量エネルギーの安定供給が必要であると言われれば、それに異論を挟むことは難しい。しかし、もはや、そうした暗黙の追認を続けることはできない。我々もまた成長神話に信頼を置

き、結果的に安全神話の一部を支えてきたことを自覚すべきであらう。

安全神話の崩壊という言葉に触発されて、行き場のない怒りを政府や東京電力に向けてだけでは、長期的な展望を開くことはできない。がむしゃらに成長を求める時代は終わった。多くの経済大国は、成長の副産物として貧富の格差や環境破壊を生み出してきた。わが国は、それとは異なる「脱成長」の経済モデルを示し、エネルギー消費を抑制しながら、安定した社会基盤と豊かな自然環境を備えた、成熟した国造りを目指すべきであらう。再生の物語は、信頼に足る、新しい神話を世界に伝えることになる。

(同志社大教授・キリスト教思想)